欠けたままの月

委員長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
欠けたままの月

【Ｎコード】
Ｎ７０７６Ｘ

【作者名】
委員長

【あらすじ】
異形の住む山の近くの村に生まれた青年の成長ストーリー。

プロローグ　村を守る剣（前書き）

筆者の初めての作品となります。物語の青年と共に成長していきたいと思っています。誤字脱字もあると思います。感想、アドバイスなどありましたら是非お願いします。

プロローグ　村を守る剣

ガキンッ！

髪の白くなりその顔に皺のある老人と若々しい青年が剣を打ち合う。岩から削りだされたような無骨な刀身を持つ大剣を構える青年に対し、老人が構えている剣は薄く伸ばされた鉄を刀身に持っている。普通なら打ち合いを避けるべきであるのだが、老人はそれに付き合っている。なのにもかかわらず、老人の剣が欠けたりすることはない。老人は勢いの乗った青年の剣と打ち合っているのだが、体勢を崩すこともない。これは彼らの間に大きな力量の差があることを示していた。

「どうした？今日も何も出来ずに打ち合いが終わってしまうぞ」

「うるさい。老いぼれ。今に、見てろよ」

老人にはまだ余裕が感じられるが、青年の方は息も絶え絶えである。定められた時間や青年の体力的にも次の打ち合いが最後になるだろう。青年は緩慢な動作で大剣を振り上げ、そのまま斜めに切りかかった。が、次の瞬間には剣は手から離れ、後頭部に衝撃が走っていた。

「今日はここで終わりじゃ。もっと精進せんと村は守れん」

青年は薄れる意識の中で、老人の声と剣を鞘に収める音を最後に聞いた。

青年は物心ついた頃から既に修練を受けていた。青年の生まれた村を守る剣として育てられていたのだ。父親は、既にその役目の真っ只中であったため、修練を担当するのは専ら祖父の役目であった。太陽の昇る方にある山には、異形が住んでいる。村を守る剣は、代々受け継がれ、その山の異形から村を守る役目を負っていた。青年はその一族の末裔であり、修練を欠かすことはできない立場にある。

青年が目を覚ますと、見慣れた藁の天井がある。身体を起こすと、後頭部に鈍い痛みが走る。どうやら気絶されられてからあまり時間

はたっていないみたいだ。
「もう起きたの。まだ治癒をしていないのだけど」
声のするほうに青年が顔を向けると、金髪の少女が横であきれた顔をしていた。
「サヤの治癒は荒っぽいから遠慮しとくよ」
「そんなこと言わないで、練習に付き……じゃなくて治癒を受けなさいよ」
サヤ、と呼ばれた少女は青年を捕まえようとするが、青年は、それをスルリとかわして外に出て行った。
「ケン！ちょっと待ちなさいよー！」
「ちょっと村の周りを走ってくるだけだからー！」
そう言って、止まる気配を見せないケンを追うのを諦めたサヤは家の中に入っていった。
剣には鞘が存在するように、村を守る剣にも「鞘」がある。いかに修練を重ねた「剣」でも、傷を負うことがある。その傷を「鞘」が素早く癒すことで少数で村を守ることを可能にしているのだ。「鞘」は、代々受け継がれる村を守る剣とは違い、水の下級精霊である「治癒の精霊」と契約できた者が選ばれる。水の下級精霊である「治癒の精霊」は無数に存在し、その数だけ契約する方法がある。運良く精霊と契約できた人は、村を守る剣の「鞘」になる。そして一対となった「剣」と「鞘」は本来の名前を呼ばす、お互いをケン、サヤ、と呼び合う。そうやって、信頼を深めていき、村を守っていくのだ。
既にこの村には四組の剣と鞘がある。青年と青年の父親と叔父、そして青年の弟である。叔父に子供はおらず、しかもまだ青年とその弟は実戦には参加できないので今のところは父親と叔父が交代制で村を守っている。そのうち、青年と弟が成長すれば全員が戦えるため一人当たりの負担が減るのであろうが、青年の様子を見る限りまだまだ先の話になるだろう。

1話　剣と弟

　青年は今日、朝早くから祖父に呼ばれ、修練場に行くことになった。今日は祖父が定めた手合わせの修練の日のようだ。３０日周期でやってくるその日は、青年にとっては憂鬱な日であった。
「今日こそは勝ちなさいよ。いつまでも弟に負けてちゃ格好悪いんだから。」
「わ、わかってるよ……。」
手合わせの修練は、祖父が考え出したものでその内容はいたって簡単である。青年とその弟で、実戦のように戦うだけだ。その時使う武器も、修練用の武器など存在せず実戦で使うものを使用する。致命傷となりそうな攻撃が放たれた場合、祖父がその場で止めるつもりのようだ。まだ、そんなことになったことは一度もなかったが。
　ケンとサヤが修練場に向かうと、既にそこに一組の剣と鞘がいた。青年によく似た顔をしたまだ幼さを残す少年と、青年より一回り程大きな男が立っている。
「おはようございます。ウォルト兄さん、ノアさん。」
少年がその青い髪を揺らしつつ、頭を下げて挨拶する。ノアさん、と呼ばれた金髪の少女は少年に微笑みつつ答えた。
「おはよう、グレイツくん。バルドーさん。」
「ああ。」
それに続いて青年が無愛想な返事を返す。どうやら手合わせに向けて集中しているというわけではなく、ただ単に少年のことが気に入っていないだけのようだった。しばらくした後、少年の横にいたバルドーさん、と呼ばれた男が反応した。
「お、やっときたのか！元気かお前ら！」
「はい。バルドーさんも元気そうですね！」
「ああ。」
元気よく反応した男に元気よく返事を返すノアに比べて、ウォルト

はまたしても反応が薄い。グレイツの鞘であるバルドーに対しても対応は同じのようだ。ウォルトを除く三人が歓談していると、白髪の老人がこちらに歩いてくる。
「あ、おはようございます。リフ様。」
「おはよう。リフさん。」
「おはようリフ爺。今日も元気そうだな。」
「よぉ、じじい。」
それぞれに違う反応をして、四人はリフの言葉を待つ。リフは一人ずつ眺めた後、口を開いた。
「揃っているようだな。これより、手合わせの修練を始める。」
リフがそう言い終わると、ウォルトとグレイツがそれぞれ武器を手にとった。ウォルトの手には、いつもリフとの修練で使う自分の身の丈程もある大きな刀身の剣が、グレイツの手には刀身の短い剣が二本握られている。ノアとバルドーはリフの隣に座って観戦する体勢をとっている。リフは大きく息を吸うと、
「始めろ！」
と、声を上げた。
ウォルトが剣を構えているとグレイツは既にウォルトに向かって走り出しており、距離を詰めていた。刀身の短い剣がウォルトに向かって走る。これから振り出しては間に合わない、と判断したウォルトは打ち合うことはせず後ろに跳んでなんとか避ける。そして、そのまま大剣を横薙ぎに振り払った。その一撃にグレイツはたまらず後ろに下がる。ギリギリでその一撃を避けたかと思うと、次の瞬間グレイツは振り切った隙を狙い全力で距離を詰めていた。ウォルトの右腕に切り傷が入る。続け様に振られたもう一振りの短剣がウォルトを襲う。さらにもう一筋右腕に傷が入った。
「ち……。」
「止め！あと九回やるぞ！」
リフが一旦手合わせの修練を止めた。ウォルトの右腕からはポタポタ、と少しずつ血が滴っている。一回目はグレイツに有利な状態で

終わった。大剣を使うウォルトは隙が大きく、その瞬間に攻撃されるととても不利になる、ということをよく知った上でのグレイツの猛攻であった。ウォルトの一撃の間合いをよく知っているグレイツにとって、当たるか当たらないか、というギリギリで避けることも容易だったようだ。ウォルトとグレイツの二人は、お互いの鞘の元へ歩いていくとドサッ、と音を立てて地面に座った。

「治癒に五分ほど下さい。」

ノアはそうリフに言うと、目を瞑ってウォルトに向かって頭を下げるような体勢をとった。そして、片方の手を傷にかざす。そのままの状態で三分程経っただろうか。ノアの手のひらが徐々に青い輝きを放ち始めた。すると、じわじわ、と血の出ていた傷口が青い輝きの強さに応じてだんだんと塞がっていった。

「ありがとう、サヤ」

「今はノアでしょ？それよりどう？治癒のスピード速くなったでしょ？」

言われてみると確かに早くなったな、とウォルトは答えた。しかし、その右腕には血はついたままである。ウォルトは、リフに川に行ってくる、と言うとすぐ近くにある川に向かっていった。

2話　剣と叔父

ウォルトが川に着くと、その近くにいた長い尾を持つ鳥が空に羽ばたいていった。この川は山から流れてきているが、異形の影響などは受けていないらしく、飲み水などとして使われている。下流には田畑が広がっている。川岸まで辿り着くと、川の中に右腕をつける。

ウォルトは腕の掃除を川の水流にまかせて先程の手合わせの修練の反省を始めた。接近を許さないように立ち回るか、どうにかして剣の打ち合いに持ち込めばこちらにも分はある、と考える。だがしかしそれが難しいことだということも分かっている。どうすれば勝てるのだろうか……。ふと、武器を変える、という考えが浮かんだが、すぐにその考えを捨てた。今さら武器を変えたところで、さらに実力に差が出るだけでいい案だとは思わなかった。それに、あの日の叔父の剣技を思い出せばこの大剣以外使う気にはなれなかった。

とても昔のこと、しかしウォルトは今でも鮮明に思い出せる。その日はじとじと、と雨が降っていて昼だというのにまるで夜のように暗かった。ウォルトはまだ幼く、短剣を使って修練をしていた。その短剣を背負って村の周りを走る修練をしていたのだが、一番山に近付いている地点でその声に気づいた。声の主が「何」かは分からなかったが、およそ人間が出せるような声ではなかった。獣の類かと思ったウォルトはその声を無視しようとしたが、初めて聞くその声への好奇心に打ち勝てずその声のする方へ向かっていった。

近付いていくにつれだんだんと大きくなるその声と共に、金属が何か硬い物とぶつかりあう音も聞こえる。木から木へと移りつつその地点に近付いて顔だけを出した。そこに広がる光景に、ウォルトは声を出すことも目を逸らすこともできなくなった。

そこには大きな剣を持つ叔父と異形がいた。異形には、筋肉のような盛り上がりのある褐色の足が四本、ずんぐりとした胴体と思わ

しき部分から生えていた。前足には石のようなものが一定間隔で埋め込まれていて、胴体に近付くにつれその間隔は狭くなっていた。後ろ足の後ろ側には燃えるような赤色の毛があり、ゆらゆら、と揺れていた。ウォルトが胴体から上を見ようとしたときには、異形はもうその場所にはいなかった。その代わりに、何か硬い物が砕け散る音とずしゃっ、という肉が引きちぎられるような音が聞こえた。次の瞬間、ウォルトの目の前に見覚えのある物体が飛んできた。それは、一定間隔で石のようなものが埋め込まれている先程見た異形の前足だった。ウォルトは、血のような液体を噴き出しながらびくびく、と痙攣している足を見て、

「ぎゃあああああ。」

と、悲鳴を上げてしまった。次の瞬間、目の前にきらり、と光る物体と大剣がありウォルトは腰を抜かした。さっきからずっと聞こえていた異形の声を一番近くで聞くことができた瞬間であった。異形のずんぐりとした胴体から、よく見かけるようなカマキリの上半身が生えており、カマキリの象徴であるカマが上半身から二本生えていた。目の前で光っているのはそのカマだった。さらに顔には赤く大きな目が三つあり、爛々としていた。鋭利な輝きを放つカマと、叔父の大剣がギリギリ、と音を立てている。叔父はそのまま大剣を押し切って、異形の体勢を崩すことに成功する。前足の無くなった分、上手く力が出せないようだ。そのまま切りかかる大剣に異形は片方のカマを合わせようとするが、ぶちっ、という嫌な音と共に異形のカマは遠くに飛んでいった。そのまま、異形は大剣の一撃を受ける。が、勢いが殺されていたのか、致命傷を与えることはできなかったようだ。異形が悲鳴のような、興奮したような声をあげる。叔父はそんな異形にさらに一撃を加えた。その一撃を受けた部分が凹んで、じわじわ、と血が出ている。叔父は動きの鈍った異形に向かって、大きく剣を振り上げて勢いよく振り下ろした。異形の顔面がぐちゃ、と音を立てて、なくなった。頭を失った異形は音を立てて倒れた。ウォルトはその光景をスローモーションで見るように見

ていた。顔を上げると、困ったようにこちらを見ている叔父と目があった。
「大丈夫だったか？」
そう優しく問いかける叔父に
「ありがと、おじさん」
と、ウォルトは答えた。叔父はウォルトに対して怒りはしなかった。それが幸いして、ウォルトは気を落ち着かせることが出来た。落ち着くと、先程の好奇心がむくむくと膨れ上がってきた。
「おじさんおじさん、今のが、いぎょうですか？」
「そうだぞ。足が八本、手は四本あったんだぞー」
冗談のようにかえす。しかし、その話は本当でウォルトが辿り着いた時にはもう半分の手足しかなかったのだ。異形が、悲鳴を上げたウォルトに悪あがきのように向かっていたのもそういう理由からだったようだ。
　ウォルトがその好奇心を満たすと、右腕から血が出ていることに気付いた。手合わせの修練の怪我と一致したその光景がウォルトの意識を今に引きずり戻した。川で洗われたその右腕の血はすでにきれいになっていて、切り傷などなかったような自分の肌が見える。
「よし、そろそろ戻るか……」
ウォルトは溜息を一つついて立ち上がり、叔父の剣技を思い出しながら手合わせの修練の場所に向かっていった。
　手合わせの修練が始まってから、ずっと負け続けていたウォルトだったが、今回もその例に漏れず、一勝もできないまま手合わせの修練が終わるのであった。

3話　剣と雨

長い雨が降っていた。雨が降っていると修練は休みになる。それでも、ケンは体を動かしたくてまた村の周りを走りこんでいた。雨を吸った衣服は重く、ふくらはぎのあたりにまで泥が撥ねているが、そんなことは気にせず黙々と走る。動いていないと頭の中で悪いことばかり考えてしまいそうだった。一向に縮まらない祖父との差、今も気を抜かずに村を守っているであろう父親。こんなことばかり考えてしまうのは雨のせいだろうか。

「もっと強くなりたい」

誰に言うでもなく呟いて、ケンは自分の意思を確かめた。

家に帰ると濡れた体を拭くための布が履物を置く場所の一番上に置いてあった。おそらくサヤが用意してくれたものだろう。その布を取りつつケンはサヤに声をかける。

「ただいま、サヤ」

「……」

ケンが声をかけるが、サヤの反応はない。正座をしつつ、うつむいていてその表情はよく見えない。

「寝てるのか？」

そう言いつつサヤの肩に手を置くと、サヤは体をびくっ、と震わせた。そのまま顔をあげて咎めるような目でケンを見つめた後、ため息をついた。

「驚くから急に現れないで」

「何してたのさ」

ケンは別に急に現れたわけではなかったが、サヤが怒っているのがわかったので訂正したりはしなかった。

「精霊を素早く呼び出す練習をしていたのよ」

サヤは立ち上がって答えた。ケンは、練習の邪魔をしてしまったのだと気付くと申し訳なさそうな顔をしてごめん、と素直に謝った。

ケン自身も剣の修練をしていた時に邪魔されたら不機嫌になるのが容易に想像できたからだ。素直に非を認めたケンに
「じゃあ私夕飯の支度をしてくるね」
と、言って村で採れた野菜を片手に家から出ていった。その後ろ姿を眺めながら、明日の天気のことを考えるケンであった。

――――――――――――――――

ケンが家に帰ってしばらく経つ。だんだん、雨が地面を叩く音が大きくなってきている。ケンは、こりゃ、明日の修練もないだろうな。などと呟きながら立ち上がる。どうやらごろごろして休憩するのに飽きたらしく、彼の愛用の大剣のほうへ歩いていった。もう長いこと使っているその剣は、重厚な作りでもらったときのままのような頼もしさがある。しかし、剣先が少し削れてしまっている。あの雨の日の次の日に、ケンが父親に
「短剣じゃなくて大剣で修練がしたいです」
と、我侭を言ってそれを聞いた叔父がくれたものだ。彼曰く、
「余っていたやつだから気にしないで」
と、いうことらしかった。
それからというもの、ケンはずっとその剣と共に修練を重ねてきた。もらった当初は、振ることはもちろん出来ず、背中にかついで歩くだけで精一杯だった。ケンとしては、剣先を地面につけない努力をしたつもりだったが、いつの間にか剣先が少し削れてしまった。ケンの身長がそれらしくなってから、素振りを始めたのだが、これもまた大変なことだった。今では、手合わせの修練が出来るほどになったが、この剣を使い始めたのケンからすれば素晴らしい成長である。しかし、弟に勝てなかったり、このままでは村を守れないと言われたりしていたケンは、そのことに気付くことはなかった。焦

りだけがケンの強くなりたい、という気持ちの糧の大部分であった。
ケンが何か今できる修練はないかと、試行錯誤しているとサヤが慌てた様子で帰ってきた。ケンは、ずぶ濡れのサヤに拭く物を渡しつつ、何かあったのか、と声をかける。
「さっき、川で野菜の泥を落としていたら、ケンの父親の『鞘』の人が応援が欲しいって言ってたの。グレイツくんはもう向かったみたいだから、ケンも急いで」
そうサヤが説明すると、ケンは愛用の大剣を背負って、勢いよく家から駆け出していった。サヤもそれに続き山の方へ向かう。雨はさらに激しくなっていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7076x/

欠けたままの月

2011年10月21日11時01分発行